



発行所
新潟市万代島
日本海区水産研究所
印刷所
第一印刷所
株式会社

日本海

八郎潟と袂別する

加藤 源 治

大正一二年以降、いくたびか懸案になつた八郎潟の干拓事業もさる三月の国会の予算会議で採択され、昭和三二年度から八カ年計画で、経費計一七一億円という膨大な予算が組まれ、初年度として五億六千万円が計上され、この五月から具体的な工事が進められているという。

八郎潟は秋田市の北方二〇料にあり、東西一二料、南北二七料、その水面積は凡そ二万二千町歩の一大半鹹湖で、ことに干拓事業が前記のように具体的に決定した以上干拓自体の是非については何も述べる必要はないが、問題は八郎潟という漁場の一つを失つていく今後の秋田県はどのような面に漁業を進めていくだろうか。

最近、この干拓が問題化したのは昭和二七年の秋ごろからであつて、この当時湖岸

の漁民は真正面から反対していたものである。しかし、いろいろの報道を総合すると地元の町村長らが中心となつて県知事、県選出代議士の協力の下に漁民を説き伏せて現在では拳一致の態勢をつくり、干拓への道が開かれたとのことである。このようにすでに漁民が全面的に納得した以上は、今後の補償の問題その他に万遺漏がないものと信じていたが、問題はこれだけですべてが解決したとは中されない。

農林省秋田統計調査部発行の昭和三〇年秋田県農林水産統計年表（水産編）によれば、昭和三〇年度の八郎潟における年間漁獲高は約二七〇万貫余で、同県内水面漁業の98%であり、昭和二九年以降には秋田県全漁獲高の実に50%以上を占める実績を残している。一方、干拓が完成した暁、水田からの収益は年間三十億円に及び、現在の漁業による収入の約一〇倍に飛躍するということとは、たしかに一応の朗報に違いない。しかし、八郎潟が干拓されることによつて秋田県全漁業生産高が半減するという事実には充分関心しておかなければ

ならない。この点について秋田県当局はどのような見解を持つているだろうか。

報道されるところによると、八郎潟の干拓は現在の水面積の凡そ五分の四であつて、残余の四五〇町歩ほどは依然として漁業水域として残されるという。しかし、水域の面積と漁獲高とは必ずしも相関的には変動しない。換言すれば、水域が五分の一になつたから漁獲高も以前の五分の一は確保できるという計算はこの場合保証できない。この点については、今後の漁業生物学的研究を俟つて改めて検討されるべき別個の興味ある問題であらう。してみると、秋田県のとるべき今後の漁業問題は従来の沿岸漁業の整備計画とともにまず地先の日本海沖合に移されなくてはならない。しかしこの日本海沖合における漁業というものはまだ充分には解明し盡されたものではなく、まだ多分に今後の実地的な調査研究を必要とする未知の漁場といえよう。だが、この沖合漁場の開拓は近い将来への希望としても、日本海全水域の関係諸府県の上に乗せられているこの課題への第一挑戦者として、まず秋田県が開眼してほしいということである。現にこの沖合極前線の漁場では有要洄游性魚類の洄游が実証され、また春の大羽イワシ漁業についても夢もたれている。

一般について秋田県はその漁獲の平均実績は日本海の一、二府県の最下位に近いことは、これを逆説的にいうと、これまで八郎潟漁業への依存度がそれだけ多かつたことであるかも知れない。だから、やがて八郎潟という海区が消滅するときこそ、独立して沖合漁業への関心を一層高める最良の機会となることを願つている。ここに私は八郎潟の消滅に限りない哀惜の情をおくるとともに周到に計画された干拓事業が途中で破綻を来さず見事に完成されるよう、また、秋田県漁業と八郎潟の沿岸漁民の方々が明るい希望を抱いて前進できるよう祈りたい者の一人である。

(日本研資源部長)

主なる項目 —第78号—

- ・ 八郎潟と袂別する 加藤 源 治
- ・ 第7回対馬暖流協議会
- ・ 昭和32年度以東底魚担当官会議
- ・ 蒼鷹丸による昭和32年度日本海沖合調査終了
- ・ 魚 探 渡 辺 徹
- ・ 日本海のニギス
- ・ 筏日本海号無事鰻沢に入る
- ・ 金沢大学理学部塩海実験所開設さる
- ・ 山中技官米国に留学
- ・ 渡米中の山中技官より
- ・ 編集後記

第七回

対馬暖流協議会（余市）

去る七月十六日・十七日の二日間、第七回の協議会が北海道余市町で開催された。

参加者は北海道大、東京大、東京水大、九州大、長崎大、鹿児島大、各府県水試、水研等約百名であった。今回は五年計画の当調査の結論を取纏めるため各班に別れて、それぞれ打合せを行った。その要点は次の通りである。

(1) アジ・サバ班

イ、取纏め項目の内、洞游と標識放流の項目を分離し、それぞれ担当者を決定した。

(2) 海況漁況班

イ、各県水試では、その地方における海況・漁況・海況と漁況の關係等を取纏め（印刷して一五頁程度）原稿を八月末日までに各水研に提出する。

(3) 鯿・鰯・稚魚班

（要点は印刷配付されているので省略）
イ、スルメイカ班

(4) 九月中に原稿を複製して、今後の問題点を明らかにする。

(5) アブラツノザメ班

イ、アブラツノザメの漁場・生態・生物学・組成等について報告書用紙を送付、各県水試では八月末までに班長に提出する。

(6) 漁場開発班

イ、九月二十日までに各県水試において取纏め、各副班長（各水研）あてに提出、副班長はこれを検討し、班長に提出する。

なお、次回の協議会は十月三・四日の二日間、新潟で開催される予定であるので、それまでに結果の報告書が完成するよう手塚企画官から要望があつた。（日水研）

昭和32年度

以東底魚担当官会議

昭和三二年度以東底魚担当官会議は、水産庁調査研究部主催のもとに、七月一八・一九日の二日間、北海道余市町北海道区水産研究所において、日水研・東北水研・北水研の以東底魚担当官約四〇名が参集して開催された。この会議は、従来のように全国画一的なものと異なり、以東底魚資源調査を遂行する場合、研究の場に共通するところの多い三水研を北部ブロックとして行われたもので、スケトウダラを例にとつて、資源の数量変動及びこれが解害の基礎となる生物学的諸問題を、シンポジウム

形式により議事が進められた。会の内容は左の通りであつた。

議 亭

一、資源（スケトウダラ）の数量変動に関するシンポジウム

(1) 「ボビュレーション・ダイナミック

ス」の問題点

(2) ボビュレーションの構造

(3) 年令・成長

(4) 年令・成長

以上イ・ロの座長

話題提供者

東北水研 橋本技官

日水研 尾形技官

渡辺技官

高木技官

座 長

東北水研 浜井技官

東北水研 等原技官

北水研 北野技官

北水研 佐藤技官

北水研 三上技官

尾形技官

調査研究部

座 長

調査研究部

のうえ対処することになった。（日水研）

蒼鷹丸による昭和32年度日本海沖合調査終る

本年度は対馬暖流調査予算の内に初めて蒼鷹丸運航費が認められたので、西海区・日本海区・北海道区の三水研を一環した海洋調査が六・七月に亘つて実施された。

当水研は六月二三日下関港において西海水研より引継をうけ、翌三四日同港を出港西部日本海沖合の観測を開始した。途中一度新潟に寄港の後、北部日本海沖合の観測をつづけ、七月一三日余市港に入港、北水研に引継いた。観測海域は李ライン内を除く日本海沖合の全域に亘り、本州・大陸間を八回横断した。総航程は約二、七〇〇浬であつた。

この間、五四点において観測及びネット採集を、大陸最寄りの一〇点において海水放射能測定用の採水を、夜間の諸点において測定及び標識放流用のスルメイカ釣獲をそれぞれ実施した。

調査結果は、この調査と同じ期日に行われた各県水試の本州沿岸水域の観測結果と合せてとりまとめ中である。今年度の調査は前二年度の調査より季節的に一・二ヵ月早く行われているので、極前線の位置や採集生物相が前二年のそれと異なっている。（日水研）

日本海のニギス 渡 辺 徹

ニギスの全国漁獲量は、年間一五〇〇〇万貫でその約八五%は日本海の底曳網漁業の生産によつていゝ。深海魚であるといわれている本種が、毎年周期的に秋と春、量産するの、産卵にともなう成群性によるからであろう。もつとも、春漁は秋漁の一〇%内外だから、底曳網漁業全体から見た春ギスの漁は、同季饒産するスケトウに隠れてあまり目立たないことは事実である。

最近の結論では、本種は年二回、春と秋に大産卵をして大量の子孫を産み出す。もちろん、産卵は周年行われているのだから、厳冬でも盛夏でも、季節を違はず卵は産み出されるが、それらの量は春秋二期に較べて問題ではない。だからニギスの場合は——著者の知る範囲では——他のすべての漁種と異つて、半年周期で新しい群(brood)を、そのポビュレーションの中に添加していることになる。

これまでも、春の発生群、秋の発生群は生後半年(平均体長七・〇匁)では、いづれも漁獲の対象にはなつていない。漁獲に現れるのは、生後一年(体長一二・〇匁)ないし一年半(二五・五匁)を経てからで

とくに秋の発生群は、翌秋には一一・一二匁のモードをもつて(耳石の輪数は〇)漁獲物曲線の中に明瞭な分布曲線を画してい

領海とか領水と呼ばれている水域は沿岸の干潮線から三哩と国際法でままつていゝるのだが、その由来は、ナポレオン政府の頃のこと、大砲のどく距離が三哩位だつたので、そう決めたときいゝる。

しかし、ソ連のように一二哩を主張している国もある。しかし、ソ連でも特種海域については、英国との間では、必ずしも一二哩ではないようであるから、領海の範囲などと言ふものはつきりしたよりどころなどない様にも見られる。

領海と云うのは、外国船舶などの沿岸水域航海と云う面では、いろいろと考慮が払われているようだが、水産資源と云う面では、今までの程度考慮されていゝるか判然としなところである。元来大陸棚と云うものは、地形学上かつて大陸の一部であつたことだから、大

た。ところが、春の発生群は、これまで型春(耳石の輪数一)になつても漁獲されずそのほとんど全部が一年半終った秋漁に主群

(耳石の輪数二つ)としてあらわれてきた。つまり、秋漁は、生後一年の小ギスと一年半の中ギスが処女の群として漁獲の主要な

陸棚上の水域は、その国領海と認めよと云う意見があるかもしれない。水産資源は大陸棚上のみに限らない。さらに、それより沖合を漁業もあるのだから、そこでの漁業は関係国間で、科学的資料に基づいて合議調整すればよい。

日本のように三哩以上の沖合と公海としていゝても五―六哩のところ、トロールなどをもし盛大にやられたら一寸黙つておられない。と云うのは大陸棚や傾斜面での水産資源は、三哩以内の沿岸のそれと密接な関係にあるものがあつて、領海内の資源に大きく作用することが予想される。

領海間問題は、今のままでは、素人目でも不合理で、問題がおきる多くのものを含んでいるようだ。この際のこと、水産国と自負する日本が先達となつて、領海の問題について地理学上からの大陸棚さらに水産資源の実態からみた領海論を整備する必要があろう。

組成を占めていた。一方、春漁は前年の秋に強度の漁獲を加えられながらも、かろうじて漁獲をまぬかれた生後一年半の秋発生

群と二年の春発生群に依存していた。もしこのような漁獲からの処女、あるいは非処女ということが、前述の春秋二様の漁況の差であるとすれば、今春(それ以降も可能性がある)の大量な小ギス(春発生の一二年群)の漁獲は重要な意味をもつことになる。それが今秋以降の漁獲物曲線にどのような形で現れてくるか、即断することはできないにしても、注目しなければならぬ事象であらう。

ニギスの寿命は、せいぜい一年半から三年である。だから生後一年半以上になると、自然死亡率が急激に増大するだろう。成長量は初半年が七・〇匁、次の半年が五・〇匁、次が三・五匁、次が二・五匁……と一年半以降の成長量は極めて小さくなる。

異論はあるが、ニギスの漁獲は満一年―一年半になすべきだろう。(秋漁は大体うまいくいつているが)今までのところ、春の発生量と秋の発生量には大差はないようだし、年々の発生量にもそれほどの変動はないようだ。もし、この推量に大した誤りがなく、今秋の漁獲に春の小ギス漁の影響が現れてこないようなら、春漁でもつと小ギスを利用すべきだし、同時に中ギスは、もつともつと漁獲を高めることに専念すべきだと考へる。(香住支所技官)

探 魚

海洋筏日本海号

無事鰻力沢港に入る

かねてから計画中であつた北日本海漁場調査会主催の漂流筏日本海号は、去る七月六日、下村隊長以下、五名の隊員が乗込んで、関係方面の盛大な見送りをうけて、新潟港を出発した。

出発以来の悪天候のため、佐渡小木港に仮泊し、七月一三日未明より漂流調査を開始したが、例年のない悪天候に悩まされつつも予定の漂流調査を続けて、八月二日午前一〇時無事青森県鰻力沢港に入港、地元官民多数の出迎えをうけた。

漂流期は、筏製作の関係から、予定の五月六月より遅れて七月になつたが、右の漂流調査によつて、生物学的海洋学的な未知の問題について、多くの知見を得た。なかでも沖合での大羽イワシ漁獲、極前線濁流塊の動向、稚魚の生態バンク漁場の生態等に注目すべきものがあつた。

尚、本調査の成果は本年中に下村隊長によつて取纏められ、調査会より出版の予定である。(北日本海漁場調査会)

金沢大学理学部

臨海実験所開設される

数年前より計画された金沢大学部臨海実験所は、元日水研の建物を移築して、能登半島九十九湾の一角に新設され、今夏から

使用に供せられるようになった。

これで、日本海側の臨海実験所は、新大の佐渡臨海実験所と二を算することになり、日本海の生物学研究の躍進が期待されている。(日水研)

山中技官米国に留学

山中一郎技官は、この度官命により、米国立研究所(日本の海区水研に相当)で外国人に対する Fellowship がないので身分を大学の研究員として、仕事を水研ですることになつてゐるわけだ。この SPEI の研究員の大部は、カリホルニア大学の講師又は嘱託研究員を兼ねてゐるに併置されてゐます。これは太平洋水研(ホノルル)、北太平洋水研(シアトル)等でも大体同じだそう。北太平洋、南太平洋及びメキシコ湾、五大湖、アラスカ等に各海区水研があるようです。私の正式の仕事等については、公文書で日本に連絡するよに依頼しました。

Mr. I. Yamanaka
c/o P. O. Box 271
La Jolla, California, U. S. A

渡米中の山中技官より

ラホヤの生活も、もう一週間たつてやつと落着きはじめました。最初のうちは何もかも珍らしく、びつくりするばかりで五里夢中でしたが、だんだんと平静をとりもどしました。

私の仕事の方は、身分的にカリホルニア大学の外国人交換研究員ですが、仕事は、U. S. Fish and Wildlife の Service South Pacific Fisheries Investigation

の方に入つてゐます。つまり SPEI は国立研究所(日本の海区水研に相当)で外国人に対する Fellowship がないので身分を大学の研究員として、仕事を水研ですることになつてゐるわけだ。この SPEI の研究員の大部は、カリホルニア大学の講師又は嘱託研究員を兼ねてゐるに併置されてゐます。これは太平洋水研(ホノルル)、北太平洋水研(シアトル)等でも大体同じだそう。北太平洋、南太平洋及びメキシコ湾、五大湖、アラスカ等に各海区水研があるようです。私の正式の仕事等については、公文書で日本に連絡するよに依頼しました。

ラホヤの街で第一に感ずるのは、街がすばらしく美しいことです。ラホヤはサンチエゴ市の一部で人口は最近急激に増加して一万八千位だそうですが、面積は新潟市位はあるでしょう。一軒一軒の家が大きく、どんな露路でも自動車が入れない所はないし、面積と人口との関係が日本とはまるでちがいます。逆に考えると、この中で、自動車をもたない我々は結局ものすごく広い所を行動しなくてはならぬわけで、いはばガリバーが大人国に旅行したのと似たような環境におかれてゐるわけです。

カリホルニア州は日本人が多いといわれますが、その殆んどがサンフランシスコ、ロサンゼルス等に集中してゐて、このラホヤでは、日本人というところ関係者

だけで、他には旅行者も殆んど来ないらしく、ホテル等でもかなり尊敬されてゐます。人種問題は今までのところ、全然感じられません。研究所に黒人の娘が事務所にいますが、平気で外人達といつしよにキヤツキヤツはしやいでゐます。スペインの影響がかなり強く、スペイン語風の店の名前がいたる所にあります。しかし、街でスペイン語で話してゐるのはあまりききません。ホテルで一度メキシコの人に会い、スペイン語で「お早う」と挨拶したらとても喜んでゐました。(中略)

発行が予想外におくれてしまひましたことをお詫びいたします。今年の夏は例年のない悪天候の連続で、七月中の晴天は、特に北日本海方面では三十四日よりない始末でした。こんなために筏日本海で調査のため日本海沖合を漂流された下村隊長以下各位の御苦心は大変だつたと存じます。なお、今後とも各地方の研究、漁業状況などお寄せ下さるよう御願ひします。(係)

編集後記

発行が予想外におかれてしまひましたことをお詫びいたします。今年の夏は例年のない悪天候の連続で、七月中の晴天は、特に北日本海方面では三十四日よりない始末でした。こんなために筏日本海で調査のため日本海沖合を漂流された下村隊長以下各位の御苦心は大変だつたと存じます。なお、今後とも各地方の研究、漁業状況などお寄せ下さるよう御願ひします。(係)